

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界



平家の怨霊
黒雲の彼方の武者

伝説

平家の怨霊
黒雲の彼方の武者

紀行

戦争と怨霊
・義経の都落ち
・布引の滝と悪源太義平
・秦武文の怨霊
・敗者の鎮魂

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

平家の怨霊 黒雲の彼方の武者

今からおよそ800年前のこと、平家一門を今の山口県（やまぐちけん）にある壇ノ浦（だんのうら）でほろぼした源義経（みなもとのよしつね）は、兄の頼朝（よりとも）と仲たがいでしてしまい、とうとう兄と戦う決心をかためました。しかし、都にいては従う軍勢も少なく、とても兄には勝てません。そこで義経は、九州・四国へ下り、その地の武士たちを味方につけて戦おうと考え、京の都を落ちることにしました。

途中で頼朝に味方をする武士たちが攻めかかってきましたが、義経たちはなんとかこれを追いはらい、今の尼崎（あまがさき）にあった大物浦（だいもつうら）から船出しました。今も三宮（さんのみや）にある生田神社（いくたじんじゃ）の森や、今は大きな工場がある和田岬（わだみさき）を見ながら進んでいくと、明石（あかし）の海峡（かいきょう）が近づいてきました。このあたりは、かつて義経たちが平家をさんざんに打ち破った一ノ谷の戦場の沖合（おきあい）です。

しかしそのころから、遠い西の山の奥に真っ黒な雲がわき上がってきました。そして、見る見るうちにあたりをおおうと、横なぐりの雨と風が吹きつける大嵐（おおあらし）になりました。義経たちの乗った船は、木の葉のように波にもまれていきます。そんな中、真っ黒い雲の彼方（かなた）に武者の姿がうかび上がってきました。

「あれは、壇ノ浦で海にしずんだ平知盛（たいらのとももり）だ。」

だれかがさげびました。みな息をのんで見つめていると、今度は海の中からたくさんの武者たちの手があらわれ、はい上がろうと船べりにつぎつぎと手をかけてきました。義経たちは、必死で刀をふるって、はらいのけようと戦いはじめました。

伝説

平家の怨霊 黒雲の彼方の武者

「弁慶（べんけい）、これはどうしたことが。」

「義経様、平家一門は、海に身を投げるとき、口々にこう言ったそうです。『われわれが負けたのは天運がなかったまでのこと。やむをえない。しかし、われわれはどこまでも怨霊（おんりょう）となって源氏をたたってやる。』いま、その怨霊たちがあらわれたのです。ここは私におまかせください。」

弁慶はそう言うと白木（しらき）の弓を持ち、船のへさきに仁王立ち（におうだち）になると、神仏の加護（かご）を祈りながらつぎつぎと黒雲に向けて矢を射かけました。すると、海の中の怨霊たちの勢いもしだいに弱まっていき、やがて消えてしまいました。

しかし、その後も嵐はやむことはありませんでした。義経たちの乗った船は、とうとう西へ向かうことはできず、今の大阪の海辺に流れ着きました。その後、義経は吉野（よしの = 現在の奈良県吉野町）の山にかくれ、さらに奥州平泉（おうしゅうひらいずみ = 現在の岩手県平泉町）へと落ちのびていくことになったのです。

（『義経記』をもとに作成）

紀行 戦争と怨霊

義経の都落ち

源平合戦のヒーロー、源義経（みなものよしつね）。平家との戦争で大きな功績をあげながら、直後に兄頼朝（よりとも）と対立し、ついに奥州平泉（おうしゅうひらいずみ）で滅んだ生涯は、古来たくさんの物語や伝説を生み出してきた。県域にかかわるものについては、すでに「ひょうご伝説紀行 語り継がれる村・人・習俗」のいくつかの紀行文でも紹介している。



大物主神社

今回とりあげた話は、文治元（1185）年、都にいた義経が、頼朝から刺客（しかく）を送られたためついに兄と戦うことを決意し、11月初めに軍勢を集めるため西国を目指して都落ちをした事実を基礎としている。

現在、尼崎市街地の東部にその名を残す大物浦（だいもつうら）は、「ひょうご歴史の道 江戸時代の旅と名所」でも紹介したとおり、古代以来、瀬戸内海水運と、都へつながる淀川・神崎川水運（よどがわ・かんざきがわすいうん）との結び目として繁栄した港町である。ここを出航した義経一行が嵐にあって難破し、その後いったん行方不明になったことは、同時代の公家日記『玉葉（ぎょくよう）』にも記されている。



大物主神社境内の
義経・弁慶隠家跡碑

義経一行の難破が、平家の怨霊（おんりょう）のたたりであるとする話は、鎌倉時代前半に成立した『平家物語』でも記されている。ただし、『平家物語』は平家の滅亡を描くことに主題があり、義経の話はそれほど詳しくない。この話も、あらすじとして述べられるにとどまっている。

今回とりあげた話は、室町時代に成立した『義経記（ぎけいき）』をもとにして紹介した。『義経記』は、『平家物語』とは逆に、義経を主役として描かれた文芸作品である。また、この話では武蔵坊弁慶（むさしぼうべんけい）が活躍し、怨霊を退散させているが、このように弁慶が重要な役割を演じるようになるのも『義経記』の特徴である。



錦絵
摂州大物浦平家怨霊顕るゝ図
(個人蔵)



明石海峡



明石海峡から一の谷古戦場を
望む(中央の山が鉢伏山)



一の谷古戦場

布引の滝と悪源太義平

この話と同様に、源平合戦を素材とした伝説として、義経や頼朝の兄である悪源太義平（あくげんたよしひら）を主人公にした怨霊話がある。舞台はこれも「ひょうご歴史の道」で紹介した神戸市中央区の布引の滝。悪源太義平は、源氏の棟梁（とうりょう）源義朝（みなもとのよしとも）の長男で、父義朝が平清盛（たいらのきよもり）と戦った平治の乱（へいじのらん）でも奮戦したが、敗戦後捕らえられ、清盛の郎党（ろうとう）難波経房（なにわのつねふさ）の手によって斬首された。

その後清盛は朝廷の実権を握るまでに上りつめ、現在の神戸市兵庫区内にあたる福原（ふくはら）に別荘をかまえた。そうしたころ、名所として名高い布引の滝（ぬのびきのたき）を遊覧した清盛一行の前に、義平の怨霊が姿を現した。清盛を守るために難波経房が立ち向かうが、怨霊の火の玉の前にあえなく敗れ、太刀（たち）をふりかざしたまま死んでいた、という話である。

この怨霊話の源流も、源平合戦を描いた軍記物の『平治物語』にある。『平治物語』は、鎌倉時代前半に成立したもので、伊丹（いたみ）の昆陽野（こやの）で難波経房が雷となった義平の怨霊に殺されるという話が載せられており、ここから発展した話と考えられるのである。



布引の滝雄滝



布引の滝雌滝



布引滝
（『摂津名所図会』）



平相国布引瀧詣
（『摂津名所図会』）



版本『平治物語』

秦武文の怨霊

もう一つ、尼崎を舞台とした怨霊話を紹介しておこう。紀行文「海からやってくるもの」でも紹介している沼島女郎（ぬしまじょうろう）の伝説である。この話の前半に、土佐国（とさのくに = 現在の高知県）に流された尊良親王（たかよしんのう）を追って、お妃（きさき）が尼崎から船出をする場面がある。ここでお妃は海賊にだまされ、お供をしていた秦武文（はたのたけぶん）という武士から引き離されて連れ去られてしまう。だまされたことに気づいた秦武文は大急ぎで小舟に乗って海賊船を追いかけるが、ついに追いつけず、無念のあまり海に飛び込んで自殺してしまう。その後、海賊船が鳴門海峡（なるとかいきょう）にさしかかったところで、大嵐とともに海から武文の怨霊が現れ、これを恐れた海賊がお妃を小舟に乘せて放す、という話である。

これは、南北朝の内乱を描いた軍記物『太平記』に見えるもので、江戸時代の名所案内類にもよく載せられている話である。かつてはよく知られていた尼崎の伝説の一つであった。



大物橋
（『兵庫名所図巻』）



秦武文
（『淡路国名所図絵』）



秦武文
（『淡路国名所図絵』）

敗者の鎮魂

ここでは、いずれも争いに負けたものが怨霊となって勝者をおびやかす伝説を紹介した。いつの世も、敗者の怨霊はたやすく放置できない深刻なものであった。「ひょうご伝説紀行 語り継がれる村・人・習俗」の「道真の旅」で紹介した菅原道真（すがわらのみちざね）伝説もこうした心情から生まれたもので、敗者の霊を慰め、逆にその霊威によって守ってもらおうとの願いが天神信仰として広まっていったのである。



尼崎大物社（『撰津名所図会』）



尼崎大物橋跡



尼崎大物橋跡

中世には、源平合戦をはじめとして、多数の敗者が出る内戦が断続的に繰り返された。つぎつぎと生み出される敗者への鎮魂は、その時々政府にとっても重要な政治課題であった。源平合戦の後、朝廷は高野山の根本大塔（こんぼんだいとう）に荘園を寄進するなどして平家の霊の供養に努め、南北朝内乱においても、室町幕府は諸国に安国寺（あんこくじ）を建て、戦没者の慰霊を行っている。



尼崎より須磨浦まで遊覧の風景
（『撰津名所図会』）



尼崎左門殿川河口付近
（かつてはこのあたりは海であった）

そして、敗者の戦いのありさまを語り伝えることも、そうした鎮魂の行いの一環としての意味を持っていたようだ。『平家物語』などの軍記物は、それを語ること自体に、敗者への鎮魂という性格があった、という説も有力である。

歴史の中では人々のさまざまな考え方が変わっていく。しかし、こうした敗者への畏れについては、程度の差はあるが、現代の我々も持ちつづけているのではないだろうか。

用語解説

【源義経】みなもとのよしつね

1159 89。源義朝（みなもとのよしとも）の九男。平治の乱（1159年）で父が敗死した後、鞍馬山（くらまやま）に預けられるが、後に脱出して陸奥国平泉（むつづくにひらいずみ＝現在の岩手県平泉町）へ向かい、藤原秀衡（ふじわらのひでひら）の庇護を受けた。

治承4（1180）年に兄の頼朝（よりとも）が挙兵すると平泉を離れてこれに合流する。寿永2（1183）年末に兄の範頼（のりより）とともに頼朝の代官として軍勢を率いて出陣し、翌年1月に源義仲（みなもとのよしなか）を討ち取る。ついで同年2月には一の谷の戦い（いちのたにのたたかい＝現在の神戸市）で平家に壊滅的打撃を与えた。翌元暦2（1185）年2月に讃岐国屋島（さぬきのくにやしま＝現在の香川県高松市）で平家を破り、続いて3月に長門国壇ノ浦（ながとのくにだんのうら＝現在の山口県下関市）で平家を滅ぼした。

しかしその直後から頼朝との対立が深まり、文治元（1185）年11月に西国へ向けて都を離れるが、大物浦（だいまつうら＝現在の尼崎市）付近で嵐のために遭難、以後陸奥国平泉へ逃れて再び奥州藤原氏の庇護を受ける。しかし、秀衡没後の文治5（1189）年4月、頼朝からの圧力に屈した藤原泰衡（やすひら）によって殺害された。

【源頼朝】みなもとのよりとも

1147 99。源義朝（みなもとのよしとも）の三男。平治の乱（1159年）後捕らえられ、伊豆国（いずのくに＝現在の静岡県東部）に流罪（るざい）となる。治承4（1180）年8月、反平家の兵を挙げ、同年末には鎌倉を拠点とする地方政権を確立した。

寿永2（1183）年10月には東国の軍事支配権を朝廷から認められ、ついで弟の範頼（よりのり）、義経（よしつね）を西国へ派遣して源義仲（よしなか）や平家との戦いを進め、元暦2（1185）年3月の壇ノ浦の戦い（だんのうらのたたかい）で平家を滅亡させる。同年11月には、反旗を翻した義経を逮捕するためとの名目で、全国に守護・地頭（しゅご・じとう）を置く権限を朝廷に認めさせる。さらに義経を庇護する奥州藤原氏に圧力を加え、文治5（1189）年にこれを征服した。

建久3（1192）年7月に征夷大將軍（せいいたいしょうぐん）に任命される。晩年は娘を天皇の後としようとするなど朝廷への影響力拡大に努めたが、病を得て建久10（1199）年1月に死去した。

【平泉】ひらいずみ

現在の岩手県平泉町（いわてけんひらいずみちょう）。平安時代後半に東北地方で勢力を広げた奥州藤原氏の本拠地。11世紀末～12世紀初めに、奥州藤原氏初代の清衡（きよひら）が本拠をこの地に移したとされる。藤原氏の居館として柳之御所（やなぎのごしょ）、加羅御所（からのごしょ）などがあり、初代清衡の中尊寺（ちゅうそんじ）、2代基衡（もとひら）の毛越寺（もうつうじ）、3代秀衡（ひでひら）の無量光院（むりょうこういん）など、歴代の当主が造営した大寺院が薨（いらか）を並べていた。

用語解説

【大物浦】だいもつうら

現在の尼崎市街地東部。淀川へとつながる神崎川の河口に開けた都市。物流の大動脈であった瀬戸内海と都とを結ぶ、淀川・神崎川水運との結節点として、平安時代後期以来繁栄した。平安時代には、大物や神崎（現在の尼崎市西川付近）など神崎川河口部に展開していたいくつかの港を総称して「河尻（かわじり）」とも呼ばれていた。その後、河口部の土砂堆積によって陸地が少しずつ沖合に前進していった結果、鎌倉後期ごろからは、大物から見て西南の地域を指す地名である尼崎が、この周辺を代表する地名として定着していった。

【『玉葉』】ぎょくよう

12世紀末期の摂政（せつしょう）・関白（かんぱく）であった九条兼実（くじょうかねざね）の日記。現存するものは、長寛元（1164）年から建仁3（1203）年までにわたる。現在は欠落してしまっている時期のものも多い。しかし、平家の最盛期から鎌倉幕府の創設期に関する記録であり、兼実の上級公家という立場から、記された情報は公家・武家双方について比較的豊富かつ正確であり、史料的价值は高い。

【『平家物語』】へいけものがたり

鎌倉時代前半に成立した軍記物語。平家の興隆と滅亡を、仏教的な無常観を底流に置きながら記した書物。著者については、天台座主慈円（てんだいざすじえん）の周辺の人物が執筆したとの説などが注目されているが、確定的な説はない。『保元物語（ほうげんものがたり）』、『平治物語（へいじものがたり）』、『承久記（じょうきゅうき）』とともに、「四部合戦状（しぶがっせんじょう）」とも称される。これらの書物は、一定の事実を示す史料や当事者の証言なども参照しながら執筆されたと考えられている。したがって、記述の中の事実を記す部分と物語的な創作の部分との区別は、それぞれについて吟味する必要がある。

【『義経記』】ぎけいき

室町時代に成立した軍記物語。『平家物語』とは対照的に、義経の出生と奥州下り、また源平合戦後の没落の過程を中心に描く。当時すでに成立していた義経伝説や、作者の創作が多分に織り込まれている。これ以後の謡曲（ようきょく）や浄瑠璃（じょうるり）における義経関係作品にも、大きな影響を与えた。

【源義平】みなもとのよしひら

1141 - 1160。源氏の棟梁である源義朝（みなもとのよしとも）の長男。長男であったが母の出自から弟の頼朝（よりとも）が嫡男として扱われていたとされる。父と同様に少年期に関東へ下向し、久寿2（1155）年には父と対立していた叔父の源義賢（みなもとのよしかた）を武蔵国大蔵館（むさしのくにおおぐらのたち＝現在の埼玉県比企郡嵐山町）に攻めて討ち取った。平治の乱で父義朝とともに戦ったが敗れ、京都周辺に潜伏中に捕らえられて処刑された。

用語解説

【源義朝】みなもとのよしとも

1123 1160。源氏の棟梁（とうりょう）である源為義（みなもとのためよし）の嫡男。少年期に関東へ下向し、相模国（さがみのくに＝現在の神奈川県）を拠点として南関東を中心に勢力を広げた。保元元（1156）年に発生した保元の乱では父や多くの弟たちと別れて後白河天皇（ごしらかわてんのう）の方に付いて勝利する。ついで平治元（1159）年の平治の乱で、藤原信頼（ふじわらののぶより）と組んで政権奪取を狙った。しかし、平清盛（たいらのきよもり）らの軍勢に敗れ、東国方面へ脱出したが、尾張国（おわりのくに＝現在の愛知県西部）で殺害された。

【平清盛】たいらのきよもり

1118 1181。伊勢平氏の棟梁である平忠盛（たいらのただもり）の嫡男として生まれる。実は白河法皇（しらかわほうおう）の落胤（らくいん）という説も有力。保元の乱（1156年）、平治の乱（1159年）でいずれも勝利した側につき、その後の中央政界で大きな力をふるうようになる。仁安2（1167）年に太政大臣（だじょうだいじん）となるが、3ヶ月で辞任し、長男の重盛（しげもり）を後継者とする。翌年に病のために出家し、その後は福原（ふくはら＝現在の神戸市兵庫区）の別荘に居住して日宋貿易を進めるとともに、必要に応じて上京しては時の政局を左右し続けた。治承3（1179）年、後白河法皇（ごしらかわほうおう）を幽閉して朝廷の実権を握り、翌年には遷都を目指して福原へ安徳天皇（あんとくてんのう）を移す。しかし、全国で反平氏の挙兵が続く中、天皇を京都へ戻し、治承5（1181）年閏2月に没した。

【『平治物語』】へいじものがたり

鎌倉時代前半に成立した軍記物語。平治元（1159）年に発生した平治の乱の経緯を記す。作者については、都の貴族層の中で考えられているが確定的な説はない。『保元物語（ほうげんものがたり）』、『平家物語（へいけものがたり）』、『承久記（じょうきゅうき）』とともに、「四部合戦状（しぶがっせんじょう）」とも称される。

【尊良親王】たかよししんのう

? 1337。後醍醐天皇の第一皇子。元弘元（1331）年に父天皇が鎌倉幕府打倒の兵を挙げると、それにしたがって笠置山に立てこもり、ついで楠木正成の河内の居城へ移った。しかし、10月に捕らえられて土佐国幡多（とさのくにはた＝現在の高知県中村市付近）へ流罪（るざい）となった。

建武の新政が始まると帰京したが、建武3（1336）年に反旗を翻した足利尊氏（あしかがたかうじ）が京都を攻め落とすと、弟の皇太子恒良親王（つねよししんのう）、新田義貞（にったよしさだ）とともに越前国（えちぜんのかみ＝現在の福井県東部）に下り、金ヶ崎城（かねがさきじょう＝現在の福井県敦賀市）に入った。しかし、翌年3月、足利方の攻撃によって金ヶ崎城は落城、両親王も自害した。

なお、名前の読みについては、「たかなが」とも読まれてきている。この点については、本用語解説の「大塔宮 護良親王（おおうのみやもりよししんのう）」の項目を参照されたい。

用語解説

【菅原道真】すがわらのみちざね

845 - 903。幼少より学問に優れたとされ、文章博士（もんじょうはかせ、大学寮の教官）や讃岐守（さぬきのかみ）などを歴任する。政治の刷新を進めた宇多（うだ）天皇（のちに譲位して上皇）の信任が厚く、右大臣（うだ いじん）にまで昇進した。しかし、学者出身の右大臣は異例であり、従来からの権勢を保持しようとする藤原氏をはじめ、他の貴族たちの反感を買い、謀反の疑いをかけられて、延喜元（901）年に大宰権帥（だざいのごんのそち）に左遷され、大宰府で没した。

【高野山金剛峰寺】こうやさんこんごうぶじ

和歌山県高野町（わかやまけんこうやちょう）にある高野山真言宗（しんごんしゅう）の総本山。京都の東寺（とうじ）とともに、弘法大師空海（こうぼうだいしゅうかい）が活動拠点にした寺院として真言密教（しんごん みっきょう）の聖地とされる。

弘仁2（816）年、空海は真言密教の道場として、高野山の地を朝廷から与えられ、伽藍（がらん）を建立した。紀行文「鳥」で述べた、高野明神と丹生都比売明神から寺地を譲られたとの伝説は、平安中期に成立したと見られる『金剛峰寺修行縁起（こんごうぶじしゅぎょうえんぎ）』から見られるものである。

【安国寺】あんこくじ

南北朝時代、足利尊氏（あしかがたかうじ）・直義（ただよし）兄弟が、帰依していた臨済宗（りんざいしゅう）僧の夢窓疎石（むそうそせき）の勧めにより、全国の国ごとに建立した寺院。また、それぞれの安国寺ごとに塔も建立され、「利生塔（りしょうとう）」と呼ばれた。国ごとに国分寺を建立した聖武天皇の事跡に倣い、後醍醐天皇以下の南北朝の戦乱で死没した人々の慰霊のために建立された。新たに建立されたものもあるが、既存の寺院を改修してこれに充てたものもある。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
義経記(日本古典文学大系37)	1977	校注:岡見正雄	岩波書店
兵庫の伝説	1980	編著:兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
兵庫の伝説 2	1986	編集:有井基、絵:のざきジョー	神文書院

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
摂陽群談(大日本地誌大系38)	1971	編纂:岡田溪志、編集校訂:葦田伊人	雄山閣
播州名所巡覧図絵	1974	著者:秦石田、校訂:井口洋	柳原書店
西撰大観 下	1911 (1965復刻)	編纂:仲彦三郎	明輝社(復刻:内外書房)
川辺郡誌	(1973復刻)	編纂:川辺郡誌編纂会	(復刻:中央印刷)
郷土の民話 神戸編	1973	編集:"郷土の民話"神戸地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
兵庫の伝説 1	1981	編集:有井基、絵:のざきジョー	神文書院
平家物語の思想	1989	渡辺貞磨	法蔵館
平治物語(新日本古典文学大系43『保元物語 平治物語 承久記』)	1992	校注:日下力	岩波書店
平家物語 下(新日本古典文学大系45)	1993	校注:梶原正昭、山下宏明	岩波書店
神戸の伝説	1998	田辺真人	神戸新聞総合出版センター
『平家物語』の構造と構想の課題(収録:軍記文学研究叢書7『平家物語 批評と文化史』)	1998	生形貴重	汲古書院

所在地リスト



一の谷	神戸市須磨区一ノ谷町ほか
布引の滝	神戸市中央区葺合町
大物浦	尼崎市大物町

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
 〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日